

リカードの「価値と分配」の理論

中村 孚 信

I はじめに／II 価値および価値と利潤
の関係／III 不変の価値標準／IV 地代／
V 賃銀および利潤／VI むすび

I

リカードは経済学の主要問題を、生産物が社会を形成する3つの階級—地主・資本家・労働者—に、地代・利潤・賃銀という形でいかに分配されるかという分配の法則を明らかにすることにあるとした。画期的な学説の出現が、それに先行する主たる学説・理論を批判・論破することから生まれるように、彼の主著「経済学および課税の原理」(以下『原理』という)も先駆者であるアダム・スミスの「国富論」を批判的に検討することから生まれた。分配の問題は価値の問題と密接に結びついている。両者の関係についてアダム・スミスは次のような見解をとった。土地の占有や資本の蓄積がおこなわれない初期未開の社会状態では、商品の価値は確かにそれに投下された労働量に比例するだろう。しかしいったん資本の蓄積がはじまるか、あるいはまた土地の私的所有がおこなわれるならば、そこで生産された商品の価値は労働・土地・資本の使用の対価である賃銀・地代・利潤の3つの要素から構成され、これらの変動とともに価値も変動する。リカードはスミスのこのような考えに全面的に反対した。彼は、いかなる商品の価値もそれに投下された労働量に比例し、賃銀や利潤などの変化にはいっさい影響されない、と主張した。この原則は、たとえその組合せや耐用年数の異なる資本を使用したとしても修正されこそすれすこしも変わることはない、のである。

本稿は、彼が『原理』の中で展開したこの主張の論理をできるだけ詳しくかつ分かりやすく解説したものである。『原理』の関連する章は第1章「価値について」から第6章の利潤に関する章までである。なお、本文中にしばしば引用されている「編者序文」とは、参考文献の編者であるピエロ・スラッファのリカード価値論の詳細な解説を指す。

II

リカードの価値の理論は分配の理論から独立している。すなわち、商品の価値は分配—生産物にたいする地代・賃銀・利潤の割合—がどのように変化しようともいささかの影響も受けない。しかし、価値の変化は、それが賃銀に影響することを通して分配に影響する。アダム・スミスが言うように、商品が労働だけで生産されているならば、その価値は投下労働量に比例して決まる。この原則が、資本の使用あるいは土地の占有がおこなわれても変わらないことを説明するために、リカードはまず『原理』第1章「価値について」の章で、資本の蓄積がおこなわれた場合の価値の問題および賃銀あるいは利潤との関係を論じ、第2章「地代について」の章で、土地の使用にともなって生じる地代と価値の関係を扱った。

資本は「固定資本」と「流動資本」に区別され（ただし、リカードはその区別に明確な線は引けない、と言っている—『原理』35頁—）、各々の資本には耐久性がある。流動資本は労働者を雇用するための基金であり、固定資本はそれ以外の生産手段を総括したものである。

さて商品が労働だけを用いて生産される場合、商品の価値は投下労働量に比例して決まる。2人の労働でもってつくられた商品1個は1人でもってつくられた商品2個と交換されるだろう。そして、商品の価値はすべて労働者に帰属する。次に、資本家が一定の資本でもって労働者を雇用して商品を生産するものとしよう。1人の資本家はその資本でもって10人の労働者を雇い、他の資本家はその資本でもって20人の労働者を雇って商品を生産するものとする、この場合も後の商品1個は前の商品2個と交換されるだろう。しかし交換される商品の価値は、今度は労働者と資本家に帰属して、賃銀と利潤に分割される。10人の労働者でもってつくられた商品の価値はそれが11人以上の労働者でもってつくられないかぎり増加しないから、もし賃銀が上昇したならば、それに反比例して利潤は下落しなければならない。また、相異なる職業で用いられる道具が、たとえば10人の労働者によってつくられ、ともに同一の耐用年数をもつものとしよう。そのとき10人なら10人の労働者がその職業に従事しそれらの道具を用いて商品を生産するならば、両方の職業においてつくられる商品の価値は等しい。すなわち、ここでは固定資本は労働の蓄積されたものと考えられているため、同価値の、つまり蓄積された労働量が等しいがゆえに同価値をもつ固

定資本を用いて生産された商品の価値はやはり労働量に比例するのである。このことは、耐用年数の等しい固定資本を用いた場合、固定資本と流動資本の使用割合が同一である場合、にも等しくあてはまる。後者は、兩種の資本の耐用年数が同一でかつ同価値の固定資本と、同一の流動資本したがって雇用される労働者の数は正確に等しいのであるから、全体として商品に投下された労働量は等しいはずである。したがってこの場合、効率的な生産方法・組織の改善あるいは新しい技術の発明や発見によって労働が節約されるならば、そのときは必ず商品価値は下落する。そしてこれ以外に商品の価値が下落することはありえない。労働の報酬である賃銀の騰落は利潤の下落あるいは上昇に関係するけれども、やはり価値には何の影響も与えないのである。

ところが、固定資本と流動資本のいずれかまたは両方の耐久性が異なるならば、あるいは両者の使用割合が異なるならば、それらを用いて生産された商品の価値はもはや等しいとは言えなくなるのである。たとえ商品の生産に雇用された労働者の数が正確に同じであっても、耐久性あるいは兩種資本の使用の割合が異なる資本を用いて生産された場合には、商品の価値は異なってくるのである。そしてこれらの資本の耐久性あるいは使用割合の異なる程度に応じて、これまでは価値にまったく無関係であった賃銀の変化が価値に影響するようになる。現実の生産は、兩種資本の使用割合および耐久性の異なる資本の様々な組合せよりなるから、結果的に賃銀が変化すると商品の価値も変化するようになる。このことは、Iで述べたアダム・スミスの見解一すなわち、価値は地代・賃銀・利潤の3つの要素からなるから、そのいずれか、たとえば賃銀の上昇は商品の価値をひき上げる、という見解を支持しているように見える。しかしリカードはこの説は誤まっているばかりでなく、賃銀の上昇は商品の価値をひき上げるどころか逆にひき下げる、と主張するのである。いずれにせよ、上述の事柄は商品の価値は労働量に依存して決まるという原則を大きく変えるように見える。しかし、後に見るように、これらの事情は価値になんらかの影響を与えるけれども、価値を決定的に左右するのはやはり投下労働量以外にありえないのであって、それゆえリカードはこれらは価値を「左右する」と言わずに、「修正する」という表現を用いたのである。

ここで固定資本と流動資本の使用割合が異なる場合どうして価値に差が出てくるのか、という問題について考えてみよう。たとえば、Aは100人

の労働でもってつくられた機械を購入し、それをを用いてあらたに雇った100人の労働でXという商品を生産するものとする。一方、Bは100人の労働者のみを雇ってYという商品を生産するものとする。この場合、XはYの2倍の価値をもたなければならない。なぜなら、Xの生産にはYの生産よりも2倍の労働量が投入されているからである。しかし、実際には、XはYの2倍以上の価値を持たねばならない。というのは、Xには機械という資本にたいする報酬が含まれなければならないからである。利潤率が10%、労働者の賃銀が10万円とすると、100人の労働でもってつくられた機械は1,100万円の価値をもたねばならない。Aはこの機械とさらに100人の労働者を雇ってXという商品を生産するのであるから、Xは2,200万円の価値をもつ。一方、Bは100人の労働者だけを雇ってYという商品を生産するのであるから、それは1,100万円の価値をもつだろう。Xは正確にYの2倍である。しかし、Aは機械にたいして10%の利潤を得るはずであるから、実際には、 $X = 2,200 + (1,100 \times 0.1) = 2,310$ 万円の価値をもつのである。

さて、以上の説明では、あたかも価値は賃銀と利潤の和によって決められるように見える。アダム・スミスが主張するように、価値が賃銀と利潤の従属変数であるならば、たとえば賃銀の上昇は必然的に価値の上昇を招くだろう。リカードの主張は、価値は賃銀と利潤の変化からは独立であり、したがって価値は定数として取り扱かわねばならない、ということである。そしてこれまで価値の形成はたんに労働量に比例したが、固定資本が使用されるようになると、資本の使用にともなう利潤を考慮する結果それだけ価値は大きくなるけれども、それにもかかわらず、賃銀の変化は価値に影響しないことを主張するのである。しかし、資本の使用と価値の関係をなおいっそう研究した結果は、リカードをして分配の変化は価値に影響しないという原則に変わりはないけれども、その原則を多少なりとも修正せざるをえない奇妙な発見へと導びいた。それは、アダム・スミスが主張するように、賃銀上昇が価値をひき上げるということとはまさに反対に、賃銀上昇は商品の価値をひき下げる、という発見であった。そのことを次に見てみよう。

上述の例では、商品Xは固定資本と流動資本を組合せて使用する結果、価値は2,200万円ではなく、2,310万円でなければならなかった。商品Yは流動資本のみを用いて1,100万円の価値をもっていた。ここで賃銀が5

%騰貴したとしよう。100人の労働者を雇うためには1,050万円の資本が必要となるから、労働者のみを用いて生産をおこなっているBの利潤は、商品の価値は1,100万円で変わらないから、50万円すなわち5%以下に下落するであろう。一方、Aについては、次のようになる。機械の価値は1,100万円であり、100人の労働者を雇用するのに必要な資本が1,050万円であるから、利潤率が5%に下落すると、流動資本にたいする利潤が50万円と機械にたいする利潤が $1,100 \times 0.05 = 55$ 万円となる。したがってこの場合、商品Xの価値は2,310万円ではなく、2,255万円に下落するのである。すなわち、Aは固定資本を多く用いたがゆえに、賃銀が騰貴した結果、商品Xの価値は下落したのである。以上のことは、賃銀の上昇は流動資本よりも固定資本の使用割合が多ければ多いほどそれを用いて生産された商品の価値をひき下げる、ことを教える。これと同様のことが耐久性の異なる資本についても言える。耐久性の長い資本と短い資本では、後者の方がその本来の効率の維持のためにより多くの補助労働を必要とするから、したがってより流動資本に近い性質をもつから、耐久性の長い資本を多く用いれば用いるほど、賃銀の上昇はこれらの商品の価値を相対的によりひき下げるだろう。リカードのこの奇妙な発見は、アダム・スミスをはじめこれまで信じられていた説と正反対の結果を導いたが、これが経済学にとって重要な発見であることを彼は強調するのである。なぜなら、高価な機械あるいは耐久性の長い機械や労働節約的技術の発明、効率的な組織や生産方法の発見などは、商品の価値をひき下げる方向にはたらくから、それが多ければ多いほどすべての大衆にとっては利益になるはずだからである。これらの発明や発見が、たとえ労働者の必需品の生産に影響してかれらの賃銀をひき下げるようなことがあっても、賃銀の下落以上に必需品の価格の下落がより大きいのであるから、やはりかれらにとっても大きな利益となるのである。以上述べた諸点をスラッファは次のように解説している：「物の価値が調整されるのはその生産に要した労働量によってであってその労働の報酬によってではない、という原則をリカードは重要視しているのであるが、それは、彼の新理論が反対したのは、たんに価格におよぼす賃銀の影響にかんする通俗の見解（賃銀上昇は物の価値をひき上げるという見解—筆者注）にたいしてだけでなく、さらにもう1つのより一般的なアダム・スミスの理論—これは、要するに、土地の私有や資本の蓄積がおこなわれるや、商品の価格は賃銀、利潤および地代の合計であるという

考え一にたいしてでもあった、という彼の認識を反映している(「編者序文」1頁)。」そしてまた、「彼〔スミス〕に反対して私(リカード一筆者注)が主張するのは、交換価値が変動するのは利潤と賃銀とへのこの分割のためではなく、一資本が蓄積されるためではなく、それは社会のあらゆる段階において、ただ2つの理由のために生ずるのであり、その1つは所要される労働量が多いか少ないか、他は資本の耐久性が大きいか小さいかということだ、という点にあります。一前者は後者によって、けっしてとって代わられるものではなく、ただ修正されるにすぎない、という点であります(「編者序文」li~lii頁)。」

さて以上をまとめると、商品の価値に影響するのは、まず第1に商品に投下された労働量であり、第2に資本の種類の違いあるいは使用する資本の耐久性に違いがある場合には、賃銀(したがって利潤)の変化、である。しかし価値に影響する度合は前者の方が圧倒的に大きい。上例で言えば、5%の賃銀上昇は価値をひき下げる方向にはたらくけれどもその大きさは高々2%以下であるのたいし、5%の労働者の増加は商品の価値を確実に5%ひき上げるだろう。それゆえリカードは、「そうしてみると、諸商品の価値変動の原因を評価するにあたっては、労働の騰落(これは正確には「労働の価値」すなわち賃銀の騰落とすべきところである一筆者注)によってもたらされる影響をまったく考慮外におくことは間違いであろうが、それにあまりに重きをおくことも同様に正しくないであろう。したがって、本書の以下の部分では、私はときおりこの変動原因にも言及することがあるであろうが、諸商品の相対価値に起こるすべての大変動は、それらを生産するためにそのときどきに要するであろう労働量の多少によってもたらされるものと、みなすであろう。」(『原理』41頁)、と言明するにいたるのである。

III

相対価値が変動したという場合、2つの商品のいずれの実質的な価値が変動したかは、価値がいかなる事情においても変らない不変の価値尺度、すなわち絶対価値標準でもって比較することが可能ならば、容易に特定することができるであろう。この考えがリカードをして終生悩ませることになる。「『価値の不変の標準の妄想』と呼ばれてきたものの探求は、死にいたるまでリカードの注意をすっかり奪った。」(編者序文、lvi頁)。しかし

この不変の価値標準の発見という問題について彼が関心をもったのは、「違った時および所における穀物または銀の価値を正確に測定する現実の商品を発見する問題ではなくて、むしろ価値が不変であるためにある商品が満たさなければならない条件を発見する問題であった。」(編者序文, lvi 頁)。この引用文の前半の部分は、たとえ使用された労働量が正確に同じであったとしても、商品の生産には資本の耐久性の相違や固定資本と流動資本の様々な組合せでもっておこなわれ、それが価値を変化させるもう1つの原因となるから、価値が不変であるような商品の発見はまったく不可能であることをリカードが認識していたことを示している(『原理』49-51頁)。しかしながら本稿Ⅱの最後のパラグラフで指摘しているように、賃銀の変動からくる諸商品の相対価値への影響は比較的軽微であり、はるかにもっとも重要な影響は生産に要する労働量の変化によってもたらされるのである。それゆえに、「もしもこの重要な変動原因が金の生産から取り除かれると仮定すれば、われわれは、おそらく、理論上考えるかぎりにおいて価値の標準尺度にもっとも近いものを、もつことになるであろう。金は、大多数の商品の生産に使用される平均量にもっとも近い割合の両種資本を用いて生産される商品とみなされえないであろうか？ この割合は、固定資本がほとんど用いられない一方と、労働がほとんど用いられない他方との、両極端からほぼ相等しい距離にあるので、これらの商品のちょうど中間を形成しているのではなかろうか？」(『原理』51頁)。

「リカード全集」の編集者であり、その第1巻の編者序文の執筆者であるピエロ・スラッファの指摘によると、この不変の価値標準の問題に関して、『原理』の初版と最終版である第3版とでは重要な変更が2つある。1つは、先に述べたように価値の変化しないような商品はないことにたいする確信であり、他の1つは、価値が不変であるために満たされなければならない商品の生産条件にかんするものである。先の引用文は、この生産条件についてのものである。『原理』初版においてリカードは、貨幣をして不変の価値をもつものとみなし、それが「つねに同一量の不被助労働の所産」(『原理』74頁)、すなわち固定資本の助けをまったく借りずに生産されるもの、と仮定した。すなわち、流動資本のみを用いて(さらにその期間は1年と暗黙のうちに仮定された)生産された貨幣が価値の標準とされたのである。したがって、商品の価値はその生産に使用された労働量、資本の使用割合を、貨幣生産の場合と比較することによって貨幣でも

って測られるだろう。そして賃銀が騰貴した場合、2つの商品の相対価値に変化がみられるが、どちらの商品がより大きくあるいはより小さく変化したかも測ることができるはずである。なぜなら、商品の生産には多かれ少なかれ固定資本が用いられているが貨幣の生産にはまったく使用されないからであり、したがって貨幣は賃銀の変化による価値の変動をまぬがれることができるからである。ところが、このような見解にたいして、リカードの良き論敵であったマルサスから流動資本のみを用いた商品であっても賃銀の騰貴によってその価値も騰貴するものがある、との反論が寄せられ、リカードはそれを受け入れた。マルサスが指摘したのは、1年未満の、たとえば、1ヶ月や1週間あるいは1日で資本を回転させることによって生産されている商品（マルサスによればその種類は多い）の利潤はきわめてわずかであるから、賃銀が騰貴した場合、もしその商品の価値が騰貴しないならば利潤がただちに消失するから、生産はおこなわれなくなるだろう、というものであった。しかしリカードがマルサスのこの反論を受け入れたのは、『賃銀の貨幣価格の騰貴と利潤の低下と』の結果として、『他のすべての商品の価格もまた騰貴するというのは、正しいどころではないのであって、絶対的に下落する商品種類が多いであろう、まったく変動しない商品種類もあるし、騰貴する他の商品種類も多いであろう』（序文、1x頁）、という意味においてである。とはいえ、リカードのこの譲歩は、彼をして労働の期間を1年とするか、1ヶ月あるいは1週間、1日とするかという、不変の価値標準となるべき商品の生産期間で悩ますことになる。この点について彼は、不完全ながらも先に引用した「大多数の商品の生産に使用される平均量にもっとも近い割合の兩種資本を用いて生産される商品」（『原理』51頁）という現実の生産条件に適合するような仕方で、1年という労働の期間（これは『初版』で暗黙のうちに採用されていた期間であった）を選んだ。すなわち、価値標準となるべき商品は、労働のみによって生産されしかも市場に間をおかずにもたらされるような商品と、かたや労働の使用はきわめて少なく大量の固定資本を用いずしては、したがって市場に現われるには相当の時間を必要とするような商品を両極端とした場合、それらの中間にあるような仕方で生産されたものでなければならぬ。そしてこの中間にあるような商品は現実にはほとんどの商品がそうなのである。同時に、このような商品は1年間雇用された労働によって生産されるとみなすことができる。それは1日の労働や1年以上

にわたる労働の産物という極端な期間の中間にあるという意味で。そこで金が、このような大多数の商品が生産される兩種資本の様々な使用割合の平均量でもって生産されたと仮定し、これを標準として商品の価値を測定したならば、商品の価値は、質銀が騰貴した場合、金の生産に使用された場合よりもより多くの固定資本が使用された商品の価格は下落し、より少ない固定資本が使用されている商品の価格は騰貴することがわかるであろう。

以上をまとめてみよう。リカードは、不変の価値をもつような商品が現実にはありえないことを認識していたがゆえに、標準となるべき商品はどんな条件を兼ね備えていなければならないかを探究した。そしてはじめのうち、固定資本を使用して生産された商品は質銀の変化の影響を受けるという観点から、固定資本の助けをまったく受けないで生産される貨幣を価値の標準に据えた。労働量の変化は容易に測定されるし、質銀の変化は貨幣以外の商品の価値を多少とも変えるけれども、貨幣はまったく影響を受けないからである。ところが、マルサスの指摘によってたとえ労働のみでつくられる商品でも質銀の変化の影響を受ける商品が存在することを認めた結果、価値変化の最大の要因である労働量を除外してつくられた商品で、ある条件のもとでつくられる商品、彼はこれを「金」に代表させているが、そのような商品を価値標準とした。しかし、この標準は絶対的なものでなく、論理的に考えてもっとも欠点が少ない、という意味においてである。そしてある条件とは、大多数の商品生産に使用される兩種資本の様々な組合せの平均量でもって生産される、ということである。そうであれば、質銀が変化した場合、平均量以上の資本を使用した商品の価値は下落し、そうでない商品の価値は騰貴するだろう。平均量の近傍にある商品の価値はほとんど不変のままであるだろう。このように平均というきわめてアイマイな基準に頼らざるをえなかったことは、絶対的な価値標準を求めていたリカードにとっては明らかな後退である。そして、そのような後退の原因が、彼が通説とは正反対の新説を導いた論理、すなわち質銀の騰貴は価値をひき下げるという論理にあったとは彼にとっては思いもよらないことであった（『序文』I vii 頁）。この論理は、さらにあるひとつの疑念、すなわち、経済学の主要目的が国民生産物の諸階級への分割の仕方を研究することであるというとき、その分割に変化が生じたというだけで国民生産物の大きさを変えるのではないかという疑念を生じさせた。国民生産物

の大きさ自体に変化をおこさせるようなことは何も起こらなくても、単に分配が変化するだけでその大きさが変わるならば、分配を特定することは不可能である（「序文」1xv頁）。それゆえ、彼は分配の変化の影響をまったく受けない不変の価値標準を発見することが必要だったのである。

IV

「価値について」の章で価値と資本の関係を論じたあと、リカードはもう1つの主要な問題、価値と地代の関係を地代についての章で論じている。Ⅲ章でみたように、リカードは、商品の価値は労働量の多寡に依存し、賃銀あるいは利潤の変化すなわち分配の変化から原則的に独立していることを論証したあと、もう1つの分配の構成要素である地代について、その存在がはたして商品の相対価値になんらかの影響を及ぼすかどうかを詳しく論じている。結論から言えば、地代の存在も価値になんらかの影響も及ぼさない。たとえ地代が全廃されたとしてもそれによって価値が下落することはありえない。逆に、地代の上昇が価値をひき上げる—やがてわかるように価値の騰貴が地代をひき上げるのであるから、こういう表現はありえないが—こともありえない。

地代は土地の占有と地質の不均一さそして人口の増加があるために発生する。したがってこれらのいずれかが消滅すると地代も存在しなくなるだろう。地質が不均一であるということ、つまり土地によってその肥沃度が異なるということは土地の生産力に差異があるということであるから、「そうしてみると、その使用にたいして地代がつねに支払われるのは、土地の分量が無制限でなく地質が均一でないからであり、また人口の増進につれて、劣質の土地あるいは利点のより少ない位置にある土地が耕作されるようになるからにはかならない。社会の進歩につれて、第2級の肥沃度の土地が耕作されるようになるとき、地代はただちに第1等の地質の土地に発生し、そしてその地代の額はこれら2つの土地部分の地質の差に依存するであろう（『原理』82頁）。」そして第3級の肥沃度をもつ土地を耕作しなければならなくなるや、第2等地にただちに地代が発生するけれども、「同時に、第1等地の地代は上昇するであろう、というのは、それはつねに、一定量の資本と労働を用いてこれらの土地が産出する生産物間の差額だけ、第2等地の地代を上まわらなければならぬからである。」（『原理』83頁）かくして、人口の増進とともに劣質の土地が次々に耕作される

に従って地代は上昇しつづけることになる。

土地が肥沃度の順に1等地、2等地、3等地と並んでいるとき、一定量の資本と労働を用いて耕作するならば、各々の土地はその肥沃度に応じて、たとえば100, 90, 80kgの穀物（土地の生産物）を生み出すだろう。したがって、一定の資本でもって穀物を生産しようとする資本家は、まったく地代を支払わずに最劣等の土地すなわち第3等地を耕作しようと、第2等地をその地主に地代として10kgの穀物を支払って耕作しようと、あるいは20kgの地代を支払って第1等地を耕作しようと、彼の収穫物は等しく80kgである。資本家はこの80kgの穀物の中から所要の利潤を得、残りを賃銀として労働者に支払う。そうしてみると、穀物の価値は地代を生じさせない土地に投じられた資本の大きさ、したがってそれによって雇用された労働量によって決まることがわかる。

また次のことも地代を生じさせる原因である。第1等地にはじめと等量の資本を投下することにより、たとえば85kgの穀物を収穫できるならば、資本家は第3等地を耕作するよりも第1等地に資本を投入して収穫することを選ぶだろう。この場合、1等地を借りて資本を投入した資本家は地代として15kgの穀物を地主に支払わなければならない。なぜなら、その土地に投下しようとする資本を他の用途に転用しようとしても有利な用途先は見つからないだろうし（利潤率はすべての分野で同一だから）、また資本家が地代の支払いを拒否したとしても、地主はその地代を支払おうとする他の資本家を容易に見出すことができるだろう、からである。前者のように、あらたな土地を耕作する場合、そして後者のように同一の土地にあらたな資本を投下する場合、いずれにしても収益逓減の法則が働いている。しかし両者の収益逓減は本質的に異なる。あらたに土地を耕作することによってもたらされる収益逓減は土地の本源的な生産力が減退することから生じるのであり、同一の土地にあらたな資本を投じることによってもたらされる収益逓減は生産効率が減少することから生じる。つまり前者は、生産要素たる土地と資本（あるいは労働）の比率が一定であるにもかかわらず収益は逓減し、後者は、一定の土地に資本が増加することからすなわち要素比率が変化することで収益逓減が作用するのである。前者は「規模の経済」に関係するから土地が均質であれば収益は一定である。リカードが両者の違いにまったく無頓着であったのは、共通の現象すなわち収益が逓減するからこそ穀物の価値がたかまるという説明に少しの矛盾も

感じなかったからである。限界地あるいは最後に使用される資本部分を用いて生産される穀物の一定量は、より肥沃な土地あるいはそれ以前に使用された資本部分においてはより少ない資本を用いて生産できるだろう。逆に言うと、一定量の穀物を生産するためには、土地が劣質であればあるほど、また追加する資本が多ければ多いほど、より多くの労働を必要とするために穀物の価値はよりたかくならざるをえないのである。したがってリカードが強調しているように、地代は穀物の価値がたかくなるから上昇するのであって、地代が上昇するから穀物の価値が騰貴するのではないのである。社会の一般的進歩にともなって人口が増大するとき、その増大する人口を養うべき食料生産はより劣質な土地を耕作してまかなわなければならないがために、より多くの労働を必要としその価値はますますたかくなる。その結果は、より多くの部分が地代として地主に支払われるだけで、資本家や労働者は価値の騰貴からはほとんど恩典をこうむることはないだろう。

地代がこのような事情で騰貴するのであれば、これと逆の事情は地代をひき下げるはずである。すなわち、より劣質な土地を使わないで済むかあるいは資本の使用が減少するかのいずれかである。リカードは、その例として農業上の改良をあげているが、安価な食料輸入もまたそうであろう。

V

生産物の価値は、上でみたように、地代を生じさせない限界地あるいは追加的資本部分を用いてつくられた生産物にどのくらいの労働を必要としたかによって決まるから、価値の構成は賃銀と利潤の2つの部分から成ることがわかる。そのうちⅡでは、価値と資本（利潤）の関係を詳しくみてきた。そしてこれに関連して『原理』の中でしばしば現われたのが「賃銀が騰貴したとき、……」という表現である。そこでは賃銀が騰貴したとき、分配に及ぼす影響や価値との関係については詳しく論じられているけれども、「賃銀が下落するとき」の分析はほとんどない。これは単に、賃銀が上昇する場合を分析しておけばそれが下落する際には逆の現象が起こるに違いない、という対称性のためばかりではない。リカードには「賃銀が上昇する」ケースを分析する積極的な理由があった。それは、社会の進歩と人口増加が必然的に賃銀を騰貴させる、という確信があったからである。賃銀が下落することは一時的にはありえても、中・長期的にはありえ

ないことであった。現代の用語で言えば、彼は賃銀の「下方硬直性」を念頭において議論していたことになる。そしてこの考えはやはり彼の価値概念に密接に関わってくるのである。

リカードはすべての商品は2種類の価格、すなわち自然価格と市場価格をもつ、とした。商品の自然価格はその商品に投ぜられた労働量によってきまる商品の価値に一致する。市場価格はその商品の市場における需要・供給の関係によって決まるから、需要が供給を上回るならばその市場価格は騰貴する。もしその商品の市場価格が自然価格よりもたかければ、それは資本家に予想外の利潤を与えることになる。しかしそうなると、他の商品の生産に資本を投じていた資本家はその予想外の利潤を求めてその商品の生産に参加しようとするだろう。それは同時にその商品の生産のための労働需要をたかめるから賃銀も騰貴することになる。その結果、市場価格は下落し予想外の利潤も消滅する。したがって、市場条件によって商品の市場価格が一時的にその自然価格から離れても、やがてその近傍にひき戻されるから、賃銀も利潤も本来その商品がもつであろう価値の範囲で分割される。

賃銀は労働の対価であり、労働は2種類の価格をもつから賃銀もそれに対応していくつかの呼び名がある。労働の市場価格に対応して「市場賃銀(率)」あるいは「賃銀の市場率」、労働の自然価格に対応して「賃銀の自然率」あるいは「実質賃銀」というように。さらに、「貨幣賃銀」、「穀物賃銀」と呼ばれることがあるが、これらは労働者にたいする賃銀の支払形態を指すときに用いられる。

さて、労働の自然価格は「本質的には国民の習性と慣習に依存する(『原理』113頁)」けれども、より具体的には労働者が家族や子孫を養育するために平均的に必要な食料や必需品の量に依存する。そして労働者はこれらの必需品を賃銀でもって購うから、諸商品の量はこれらの価格の騰落につれて変動するだろう。よって労働の自然価格はこれら必需品の価格に依存する。ところでリカードは、この労働の自然価格が社会の一般的進歩と人口の増加につれて騰貴する、と述べている。「なぜならば、その自然価格を左右する主要商品の1つが、それを生産することの困難が増大するために、より高価となる傾向をもっているからである(『原理』109頁)。」

一方、労働の市場価格は、市場において労働にたいする需要・供給の関係から決まる。労働の需要が供給を上回るならば、その市場価格は騰貴す

るだろう。リカードは労働の市場価格がその自然価格を上回るならば、そのとき労働者は幸福であると言う。なぜなら、労働の価格が騰貴するとき、労働者の手にする賃銀もまた上昇するであろうが、賃銀で購入食料や必需品の価格は依然として低いままだろうからである。このとき労働者の生活は大いに改善されるだろう。ところで、労働にたいする需要が活発であるときは資本の蓄積もまた促進されているだろう。なぜなら、資本の大きさが労働需要の多寡を決定するからである。そして資本の蓄積は土地の生産力に依存する。土地が肥沃なほど生産力は大きいから資本の蓄積もより大きいだろう。ところが、社会の一般的進歩と人口の増加がこの幸運な状況を変えることになる。人口の増加はより劣等な土地の耕作を余儀なくさせるが、それは一方では、労働者の必需品の価格をひき上げる傾向をもち、他方では、劣等な土地の耕作によって生産力が低下し、それが資本の蓄積を逡減させる結果、労働にたいする需要も減少していくことになるからである。そして労働の供給は、こうした状況にかかわらず一定の率で増加しつづけるのであるから、やがては労働需要の増加も賃銀の上昇もみられなくなるだろう。

さて、リカードが賃銀の上昇にもっぱら関心を注いだのは、次のようなことからであった。労働の自然価格は社会の一般的進歩と人口増加の結果騰貴していくのにたいし、その市場価格は一時的に自然価格を上回っても、それが持続する保証はどこにもない。一方、賃銀は、それが市場条件に左右されるかぎり、社会の進歩と人口増加のもとでは減少する傾向にある。なぜなら、上にみたように、労働需要は逡減するのに労働供給は一定率で増加する傾向にあるからである。そうしてみると、労働の自然価格の騰貴、したがって労働者にとっての必需品価格の騰貴に反して賃銀は低下するのであるから、労働者は生存そのものをおよびやかされることになる。それゆえ賃銀は、少なくとも労働の自然価格の上昇と同じ率で上昇していかなければならない。このことは賃銀は労働の自然価格を下限として、それ以下に下落することは労働者の生存をあやうくするという意味でありえないのである。しかしこれは、賃銀が労働者の生存水準で常に与えられるということではない。通常の古典派モデルにおいては、賃銀は生存水準で所与と仮定され、硬直的である。リカードは賃銀の下限を示しただけで、市場条件が許せば、賃銀の上昇を認めているのである。彼が賃銀の上昇を問題にすると、それは市場条件に左右される賃銀ではなく、いわ

ば自然賃金であって、その賃銀は常に騰貴する傾向にあるからなのである。

リカードは『原理』の別の箇所では、市場価格についてはそれが必要な限り言及するけれども、価値との関連を論ずる際にはこれを偶然的な攪乱要因として完全に考慮外に置く、と述べている（『原理』108頁）。そうすると考慮されるのはもっぱら自然価格の方である。これまで価値との関係で扱われてきた賃銀や利潤も自然賃銀あるいは自然利潤であって、これらは市場条件に何ら影響されなかった。こうした観点からみると、利潤率が長期的には低下する傾向にあると主張する彼の論理はほとんど自明である。すなわち、社会の自然の進歩と人口増加のもとでは、食料の生産が困難になるにしたがってそれらの価値は騰貴するけれども、騰貴した部分はほとんどが地代に吸収され利潤を高めることはない。それどころか逆に、その価値の騰貴は必然的に賃銀をひき上げるから、それだけ利潤を低下させるのである。そしてこの傾向は他の商品一般についてもあてはまるのである。

VI

リカードの「価値と分配」の理論を極端に要約すると次のようになるだろうか。価値は分配の変化から独立である。価値の形成に地代は少しもかわらないから、価値は賃銀と利潤の2つの部分から構成される。そして価値そのものは労働量に依存し、賃銀は労働の自然価格に依存する。賃銀はアプリオに与えられる性質をもち、価値はそれとはまったく異なる労働量の関数であって、労働量が与えられると価値も決まる。商品の価値から賃銀の部分を除いたものが利潤である。価値、賃銀および利潤の関係はこのようである。価値が変わらないとすると分配の変化は分配の中だけに作用して価値に影響しない。これを多少とも修正せざるをえなかったのが、固定資本と流動資本の異なる組合せによる生産が現実におこなわれている、という事実であった。さらに、同様のことは価値を測定する尺度を求めようとしたときにあらわれた。貨幣は他の商品と同様にその価値は変動する。貨幣価値の上昇は他のすべての商品の価値を同じだけひき上げるだけだから分配に何の影響も及ぼさない。しかし、それを価値の尺度とみなそうと考えたときから、リカードの苦悩がはじまったのである。

参考文献

『デイヴィッド・リカード全集』第1巻「経済学および課税の原理」堀経夫訳，雄松堂出版，1972年2月。